中世赤塚郷の景観

小松寿治

はじめに

古代から中世の武蔵国豊島郡域を伝える史料は少ない。わずかに一一世紀前半の「更級日記」[1]では、武蔵国の海沿いを通過した菅原孝標女が、「蘆、おぎのみたかく生ひて、馬にのりて弓もたる末見えぬまでたかく生ひしげりて」とのべ、官道の周辺でさえ、かなり草の生い茂った場所と見えたことを示している。

また、鎌倉時代中期に久我雅忠女二条の著した「とはずかたり」[2]には、「野の中をはるばると分け行くに、萩・女郎花・荻・芒よりほかはまた混じるもののなく、これが高さは、馬に乗りたる男の見えぬほどなれば、おしはかるべし」とある。これは鎌倉から浅草寺参詣に赴くときに見た武蔵野の情景であるが、やはり草深い原野を思わせる。一方では、「十二月になりて、河越の入道と申す者のあとなる尼の武蔵の国小川口といふ所へ下る、（中略）かやうの物へだたりたる有様、前には入間川とかや流れたる、向へには岩淵の宿といひて遊女ともにのすみかあり」とあり、入間川（現荒川）の渡しにあった岩淵（北区）には遊女のいるような宿があり、繁栄していたことも教えてくれる。これらは、浅草寺の繁栄、岩淵－川口を渡河点とする道の存在、あるいはそこに位置する岩淵の繁栄を知ることができるにとどまり、それ以外の地域を知ることはできない。

中世東国において文献による景観復原・考察は、極めて難しい状況にあることは確かであるが、近年地理学・考古学の成果などを利用して、東国各地で中世の景観を復原・考察する研究が盛んになってきている。[3] しかし、豊島郡域においては蔵持重

裕氏の豊島区域の豊島荘故地の景観を検討したもの[4]、澤登寛聡氏[5]・谷口榮氏[6]の岩淵の景観を検討したものをみることができるのみである。自治体史をみると浅草寺のある『台東区史　通史編』[7]では宗教的側面から浅草寺周辺、また隅田川周辺を交易の観点から都市的空間を中心とする景観の検討を行っている。『北区史　通史編』[8]においても岩淵の都市的空間の景観について述べている。

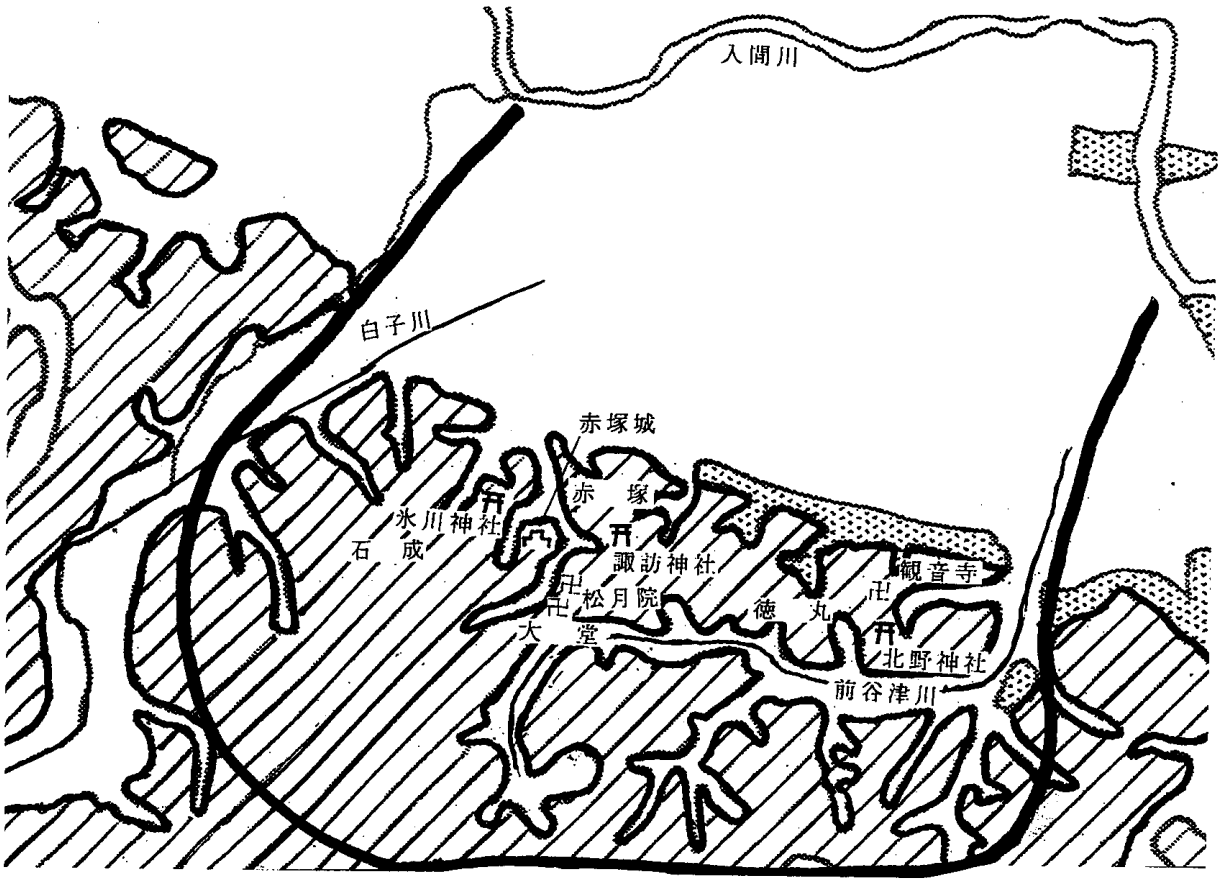
今回ここでとりあげるのは同じ豊島郡域の中で中世郷として存在した赤塚郷である。その景観の検討を行うということは、武蔵国豊島郡域の中世を考える上での一助となると考えるからである。

赤塚郷の範囲とその周辺

まず赤塚郷の範囲について述べておく。赤塚が一つの所領としてみえるのは、元弘三年（一三三三）八月ころのものと推定される足利尊氏・同直義所領目録[9]である。「和名類聚抄」にはみえないことから考えると、その成立は一〇～一四世紀の間で、いわゆる中世郷といわれるものであろう。

さて、その範囲について示す資料はないが、現在板橋区と埼玉県和光市の境界を流れる白子川が中世においても豊島郡と新羅（新座）郡の境界となっており、流路の変化はあるにせよ赤塚郷の西側は白子川を境とすると考えてよかろう。北部に関しても入間川（現荒川）を境に足立郡と接しており、そこを境とみてよいだろう。南側については、練馬郷の存在が確認されており[10]、旧下練馬村と旧下赤塚村の境界、或いは後の河越街道付近を境としていると思われる。つまり、現在の板橋・練馬区境付近とみて、差し支えはなかろう。

問題があるとすれば東側の境であろう。東側については、「新編武蔵風土記」（巻一四）によれば西台・志村・小豆沢などの地域が志村庄のうちとある。また、西台について永正一〇年（一五一三）の多田彦六老母寄進状写[11]に「志村西台之内」の表記



赤塚郷関係図

があり、ひとつの地域としての「志村」の存在が確認され、赤塚郷の東側には志村庄が存在したことがわかる。

それでは赤塚郷と志村庄が接する地域をどのように理解すればよいのだろうか。「北条氏所領役帳」[12]によれば、「千葉殿＝武蔵千葉氏」の所領のとして赤塚六ケ村とある。「新編武蔵風土記」（巻一四）では上・下赤塚、成増（本来下赤塚に属した村）、徳丸本・脇・四葉の六ケ村であると推定している。徳丸の安井新二郎家に残る「古伝書」[13]には、入間川の河川敷「徳丸原」を入会地として赤塚・徳丸の人々が共同して使用していたことがみえ、赤塚・徳丸が一体化していたことを示しているという。[14]また、慶長三年（一五九八）に出された下赤塚にある松月院の寺領帳の表紙には「赤塚上郷」とあり、赤塚郷内が上・下二郷に分かれていたこともわかる。[15]とすれば、上・下赤塚、成増村が赤塚上郷であり、それに対する赤塚下郷が徳丸本・脇村・四葉であったと考えられ、中世には一つの郷として存在していると思われる。つまり、「新編武蔵風土記」の推定は正しいとみてよいだろう。

次に赤塚郷周辺における人々の生活の跡について触れておきたい。

赤塚郷と同じように入間川に面していた地域には時代・場所によって濃淡はあるが、旧石器時代から江戸時代に至るまで、多くの遺構・遺物が発見されている。ところが台地上に縄文・弥生・古墳・古代と不連続とはいえ存在した集落遺跡は一一世紀頃には一旦消滅しており、人々がどこで生活していたかは不明となる。一般に台地上から氾濫原の低地に移動したとみられている。ちょうど当該期の早瀬前遺跡（新河岸三丁目）から、平安時代の建物跡・溝状遺構・水田跡が発見されており、自然堤防上に集落を構え、その後背湿地を水田として利用した形跡がうかがえ、一般的な考え方が妥当のような状況を示している。[16] 考古資料は、すくなくとも平安時代末期には荒川の氾濫原の後背湿地が水田として利用されていたことを示している。[17]

中世に限れば、赤塚郷と白子川を画して接している白子郷には白子宿の存在、中世の備蓄銭など中世期の人々の営みの存在を確認することができる。[18] また、志村庄においては、龍福寺所在の建長年間（一二四九～五六）板碑、志村延命寺の南北朝以降の板碑の存在などがあり、中世前期から人々の営みが連綿と続いていたことの証拠となっている。

赤塚郷のうちでは入間川に面した台地上の四葉地区遺跡から鉄鏃・鍛冶工房跡・馬の焼印など、武士団の成立と大きくかかわる遺物が発見されている。また、その存在背景は不明であるが、平安時代末期のものと思われる金銅製の観音像が出土している。[19] これらのことは、武士の時代の幕開けに板橋にはある程度の勢力を持った武士たちが活動していたことを示している。

なお、低地の氾濫原に関しては、舟渡遺跡からは中世時期の溝区画遺構や溝状遺構が発見された。特に溝状遺構からは建武三年（一三三六）・応永年間の紀年銘をもつ板碑が出土しており、平安時代に引き続き低地の自然堤防上の利用などは続いていたようである。[20] しかし、その規模については今後の考古学的成果を待たねばならないだろう。

中世の文献資料において、赤塚郷内の地名は、応安元年（一三六八）五月一一日付河越直重宛行状[21]の「赤塚郷内石成村」、延徳四年（一四九二）一一月五日付千葉玄参寄進状・天文一一年（一五五二）八月日付千葉憲胤寄進状の「戸田・袋野・平沼村」[22]、先述の「北条氏所領役帳」の「赤塚六ヶ村」がみられるだけである。このほか中世的な地名の名残とおもわれる小字には、開戸・蕪ケ谷戸・上寺家・上谷津・御料・篠ケ谷戸・下寺家・増敷・出口・番匠免・深田・前谷・谷田・谷津田・横谷津

がみられるが、これらはおおむね赤塚城跡・松月院をとりまく地域にある。特に上下寺家・御料・番匠免などは城・寺院にかかわるような小字である。同地域の開発が城・寺院にかかわったものであることを推測させるものである。徳丸地区には梶谷津・長谷津・中尾谷・前谷津などがある。これらは前谷津川の作る谷に面している。[23]

地名のほかに中世の様子を知る手掛かりに、板碑がある。板碑には地名は刻まれていないが、旧村（大字）を越えて移動することは少ないといわれ、中世における生活の痕跡を示す資料と考えてよいであろう。これによると、やはり分布は、荒川に面した台地上に多いことがわかる。[24] 時代的には志村地区の板碑から約三〇年ほど遅れるが、鎌倉時代後期から戦国時代に至まで連綿として造立されており、赤塚地域が中世の生活の場であったことが確認できる。

赤塚郷の歴史的変遷

赤塚郷の歴史的変遷は、杉山博氏[25]・『板橋区史』通史編上巻などで多くが語られているので簡単に述べておく。

赤塚の初見である足利尊氏・同直義所料目録は建武政権が行った論功行賞を記したものと考えられ、赤塚は足利直義領となっている。論功行賞であるから、所領は建武政権に敗れた鎌倉北条氏系の人々が旧領主であるが、赤塚には旧主を示す記述がなく、おそらく得宗北条高時領であったと理解される。

直義が観応の擾乱の結果、観応三年（一三五二）二月二六日毒殺されると、赤塚は直義正室渋川頼子（追号本光院）の所領となる。赤塚は頼子の一期料となったものと思われる。[26] 実際には近隣の蕨郷（蕨市付近）と頼子の実家渋川氏がかかわっていたことからみて、渋川氏が管理していたものであろう。[27] 頼子の死後、姪にあたる渋川幸子が赤塚郷を継承したのはこの辺りの経緯があるとみられる。

幸子は二代将軍足利義詮の正室である。このころ将軍足利一門は禅宗（臨済宗）の夢窓疎石の一派（夢窓派）に帰依してい

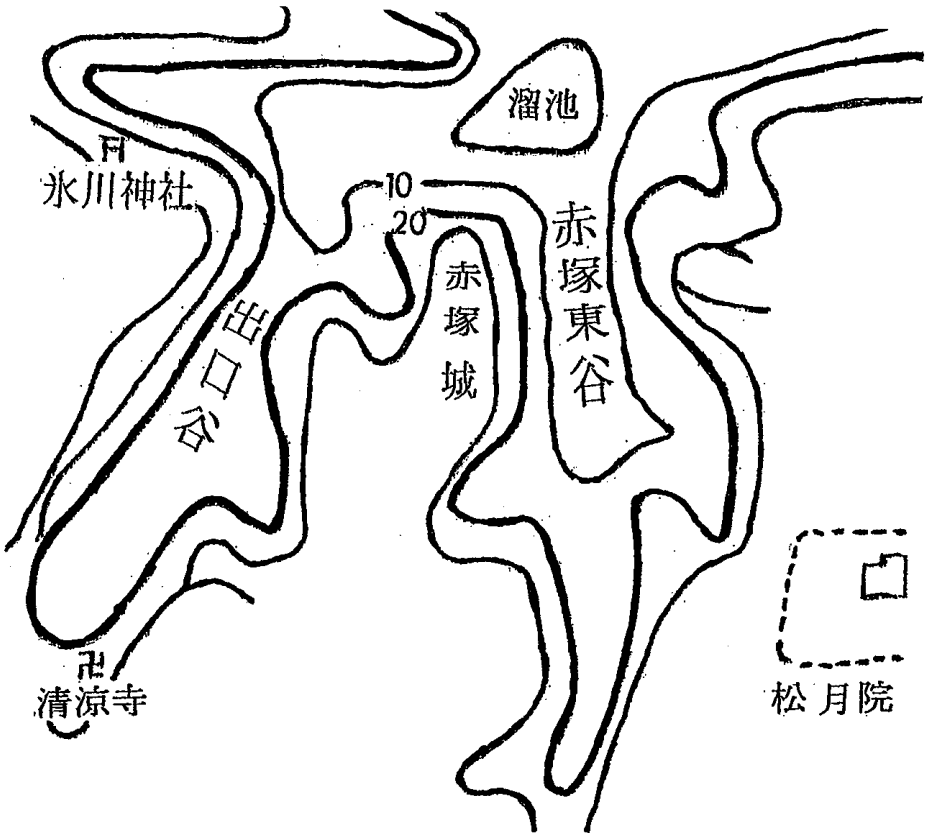
た。幸子自身も夢窓派に帰依していたが、義詮が没するとまもなく出家、如春と安名されている。[28] 義詮の十三回忌後の康暦元年（一三七九）六月二五日には石成を除く赤塚郷を義詮の菩提供養、如春自身の後生菩提料として、春屋妙葩（夢窓の弟子）に寄進している。[29] 春屋は将軍義満に招かれ覚雄山大福田宝幢寺の開山初祖となり、宝幢寺の背後に鹿王院を開創していた。そのため如春は永徳三年（一三八三）二月二九日、改めて鹿王院に対して赤塚郷一円を寄進し、菩提供養を再度依頼している。[30]

応安七年（一三七四）一一月、円覚寺が大覚（蘭渓道隆系）・仏光（無学祖元系）の対立による放火によって焼失する。夢窓派の中心である春屋は夢窓派の拠点であった鎌倉円覚寺塔頭黄梅院（夢窓疎石の塔所）の復興費用として赤塚郷の年貢を寄進している。[31] また応永二九年（一四二二）六月二一日付黄梅院奉加銭替銭結解状でも、鹿王院は赤塚から都合二六六貫文を奉加している。そのほか鹿苑院（足利義満の塔所・相国寺の檀那塔）の納める奉加銭を赤塚郷が代わりにおさめている。[32] このようなことから赤塚郷は鹿王院領として機能しつつも、関東の夢窓派の経済的支柱でもあったようだ。

康正二年（一四五六）下総国守護家千葉氏は享徳の大乱の余波から内訌を起こす。その結果、本来千葉氏本流である千葉実胤・自胤兄弟が関東管領山内上杉氏を頼り武蔵国へ逃れている。その千葉実胤が赤塚郷に入部することになる。これは堀越公方足利政知と前後して古河公方足利成氏追討のため関東に下向してきた「探題」渋川義鏡の取りなしによるといわれている。[33] この事態に鹿王院は反発し、幕府に赤塚郷の返還を求めた。[34] 幕府も政知を通じて関東管領山内上杉房顕・千葉実胤に返還を命じている。しかし、直接執行にあたるべき山内上杉氏の家宰長尾景信はそれを実行しなかった。これは実胤が山内上杉氏に属していたためである。[35] 以後、幕府は再三赤塚郷を鹿王院に安堵しているが、「北条氏所領役帳」に「千葉殿」が赤塚六か村を所領としている点からみても赤塚郷は鹿王院に返還されることなく近世に至ったと思われる。

自然景観と中世遺産

赤塚郷を地形的にみると、まず、赤塚地区は、赤塚城のある舌状台地を中心に谷を挟んで左右に赤塚氷川神社が所在する丘陵、諏訪神社が所在する丘陵がある。谷は谷奥と谷口の高低差が約二〇メートルほどあり、諏訪神社側の谷がやや狭い形をしている。



赤塚城周辺図

舌状台地の先端の下には溜池とよばれる湿地帯が存在し、この水は谷に流れ込んだ雨水・湧水が蓄水されたものであるという。赤塚城の機能については明らかではない部分が多いが、この溜池の管理と入間川対岸の監視であるとの説がある。[36] 城の形態自体は戦国時代の所産というので、武蔵千葉氏が赤塚入部して以降に城としての機能が備わったものと思われる。[37]

舌状台地の付け根からやや諏訪神社よりの平坦なところに大堂・松月院が存在する。そこをひとつの山として練馬側には前谷津川によってできた浅い谷があり、それより練馬よりは比較的平坦な地形となっている。

大堂は、建武・延元（一三三〇年代）のころは七堂伽藍を配し、山内には上下各六の脇坊を構える大寺院の中心であった阿弥陀堂といわれる。[38] 本尊の阿弥陀如来像は平安後期の作風が残るといわれ、大堂が阿弥陀堂であったことを物語っている。鐘楼にかかる

暦応三年（一三四〇）銘の梵鐘には、建長寺第四二世中岩円月の手になる銘文が刻まれている。この銘文によれば、この梵鐘が快賢という僧侶が近隣の人々の喜捨を集め造立したものであること、泉福寺・真福寺の両寺が後醍醐天皇の在位中に創建されたこと、などがわかる。中岩の作品集「東海一漚集」などに収録されていないことから、当時上野川場（群馬県川場村）の吉祥寺と鎌倉の崇福庵の間を往復した中岩が、その途上、快賢の依頼をうけて即興的につくったものであろうといわれる。[39] 千葉憲胤寄進状に「泉福寺東別当田地」とあり、泉福寺が東別当であることがわかる。したがって泉福寺と併記される真福寺は西別当となるだろう。中岩の銘文と合わせて考えると、両寺が大堂（阿弥陀堂）の勤行の中心であったと思われる。

大堂にほど近い松月院は武蔵千葉氏開基の寺とされ、中世文書を伝える曹洞宗寺院である。この寺は阿弥陀堂を中心とする大寺院の支院宝持寺が改宗されたものといわれる。[40]

寺ということでは、鹿王院領となった段階でそこには夢窓派の寺院があってもおかしくない。しかし、その痕跡を物語る伝承もない。管理に携わった鹿王門派の人々はこの大寺院を拠点としていたのかもしれない。

諏訪神社・赤塚氷川神社は共に武蔵千葉氏の勧請によるものであるといわれ、その規模ついては不明であるが、赤塚城内は武蔵千葉氏が奉斎する妙見社があった。

一方、徳丸地区は入間川の流れによって形成された氾濫原と最大高低差三〇メートルという崖によって画された台地部に分かれている。台地部の中央には赤塚地区から流れてきた前谷津川が入間川に向けて深い谷を形成している。その谷に左側は志村庄と接している。

入間川に面した台地上には、明治二九年（一八九六）に安楽寺と合併した観音寺があった。現在観音寺の本尊観世音菩薩坐像は安楽寺に安置されているが、この坐像は鎌倉時代の様式を持ち、胎内には「癸卯」の干支がある造立趣意が記されており、寛元元年（一二四三）あるいは嘉元元年（一三〇三）に造立されたとみられる。[41] 観音寺自体については、延宝五年（一六七七）の徳丸村絵図にみえる円通寺の観音堂が円通寺廃絶後、発展したものといわれるが、寛永九年（一六三二）の検地屋敷帳には

屋敷地扱いながら観音寺をみることができ、存在形態がどのようなものであったかは疑問の残るところではあるが、鎌倉時代様式の観世音坐像を擁した寺が中世から存在した可能性をもっている。

観音寺と同じ台地部には、長徳元年（九五六）に京都北野天満宮を勧請したという北野神社が存在する。

さてここまでに掲げた赤塚地区の氷川神社・諏訪神社、徳丸地区の北野神社にはいずれも「田遊び」という豊作を祈る予祝神事が伝わっている。特に諏訪神社・北野神社のものは国の重要無形文化財となっている。赤塚の諏訪神社に伝わる「田遊び」は現在そこに合祀されている十羅女社の神事といわれるが、その起源は一三世紀後半から一五世紀の間であろうといわれる。また、北野神社に伝わる「田遊び」に関する享保一〇年（一七二五）三月頃の史料は田遊びが古くから続く神事であること、田遊びに先立って行われる祝宴の席次（笠張列座）は田遊びを執行する一六の小名（小字）が何らかの法則により着座するものであり、惣村の宮座を起源とするものと思われる。[42] このような田遊びの存在は赤塚郷内に中世人が水田耕作をしていたことを今に伝えるものといえる。

中世において人々の生活の場となっていた赤塚郷には、当然道があったはずであるが、やはり、それを裏付ける史料は皆無である。しかし、「新編武蔵風土記」（巻一五五）によれば、赤塚地区の荒川対岸に位置する旧足立郡早瀬村（戸田市）には、早瀬の渡しがあり、美女木村（戸田市）より続く道があり、「古への鎌倉街道」と記されている。早瀬の渡しにつながる街道が鎌倉道であるとすれば、それに対応する赤塚側の道も鎌倉街道と考えてよい。赤塚の小名に早瀬前があり、ここが早瀬の渡しの場所とされる。早瀬前から氾濫原の中を通り諏訪社のある丘陵をあがり、松月院・大堂・泉福寺など中世創建と伝えられる寺院の付近をぬけ、さらに河越街道に至る道が存在したと考えられる。また、前谷津川に沿ってできた道もある。先にあげた中世創建と伝えられる寺社を結ぶようにしている道もある。[43] これは中世以来の道とみてよいであろう。さらに室町戦国時代には軍事的な意味合いが強かった河越街道の存在も忘れることはできない。赤塚郷の道は、赤塚城跡のある舌状台地の付け根付近を中心にしてのびているように思える。

赤塚郷の耕地

これまでのべてきたように人々の生活の場となっていた赤塚郷の耕地はどのようになっていたのであろうか。当然のことながら中世の耕地を具体的に表す史料はない。したがって他の時代の研究成果から検討しなければならない。

まず近世期の土地利用の様子を手掛かりに話を進めることにしよう。

中世に一番近い慶安二・三年（一六四八・四九）に調査した石高の記録である「武蔵田園簿」[44]によれば、赤塚・徳丸とも一千石をこえる石高を有する村であり、その生産力の高さは、耕地面積の違いはあるにせよ周辺の村落を圧倒している。水田率をみると、赤塚・徳丸・西台・中台・蓮沼・根ッ葉・志村・白子・上新座・下新座が六〇パーセントを超える。ついで金井窪・中丸・前野村が五〇パーセント台、上・下板橋村が四〇パーセント台、以下、小豆沢・下練馬・上練馬・土支田村のようにパーセントが低くなっていく。これをみると、荒川に面した地域の水田率が高いことがわかる。[45]特に氾濫原を村域の主体とする志村・蓮沼・根ッ葉村が高いのは蓮根川・出井川などによって用水を確保できたことによるものであろう。

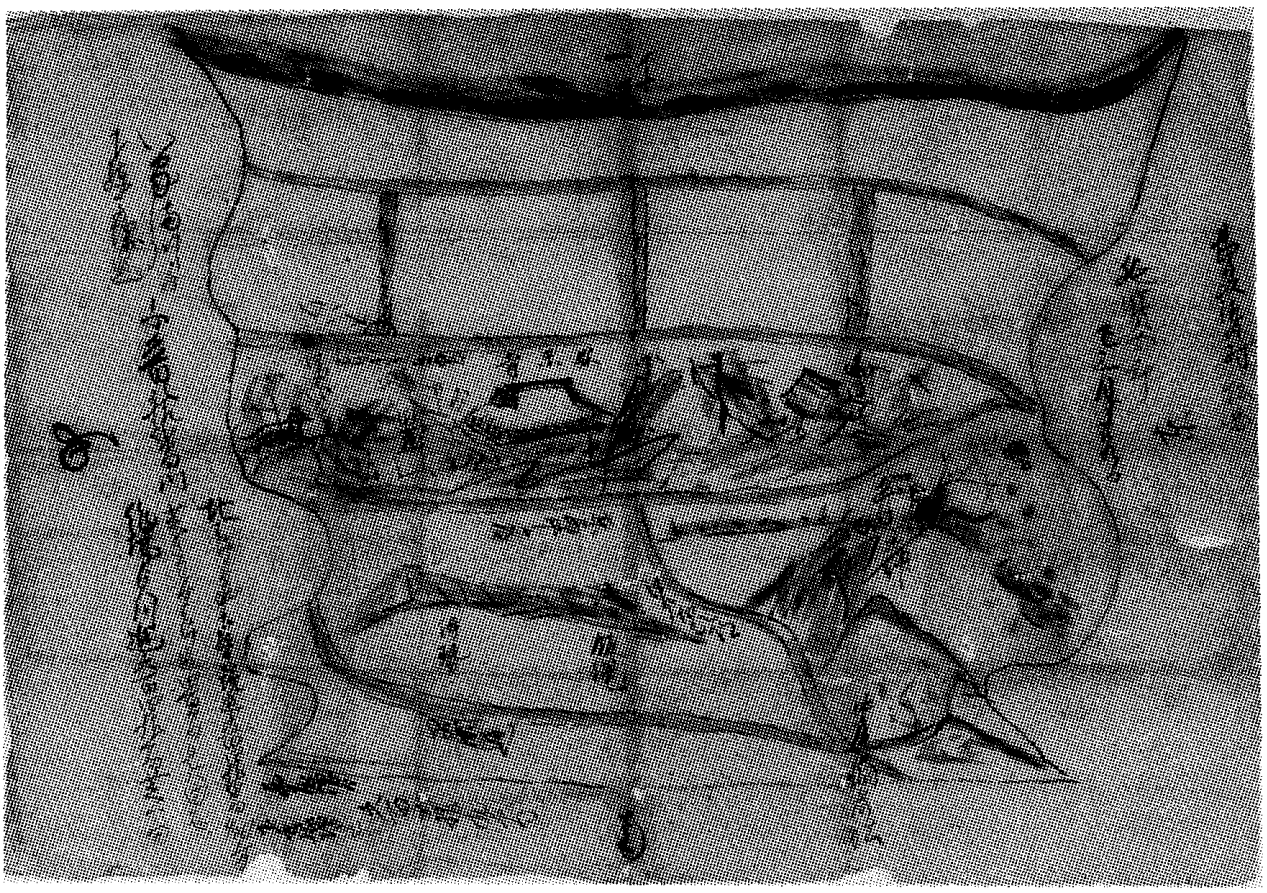
赤塚郷の赤塚・徳丸のような自然条件をもつ、つまり、台地と低地の二つをもつ村である西台、中台、上・下新座、白子村が六〇パーセント代でほぼ同様に水田率であるのも特徴であろう。

表によって近世における石高の変化をみると、「武蔵田園簿」を一〇〇とした場合、「元禄郷帳」[46]以降、概ね一一〇以上に増加している。これらから開発は、「武蔵田園簿」以降に大幅な進展をみせたということができる。しかし、中台・上新座村が二〇〇前後の爆発的増加させているのに対して、赤塚・徳丸は約五〇パーセントの増加に止まっている。これは赤塚・徳丸地域の開発がすでにある程度進んでいたことを示している。

松月院に伝わる中世文書[47]には「谷田」「平沼作田五反」「戸田」「袋野」「泉福寺東別当田地」と土地にかかわる文言がみえる。「谷田」「戸田」「袋野」は地名かもしれないが、「谷田」「戸田」が谷戸田に起因した地名であることは明白である。これらの

近世石高変遷表

		武蔵田園簿			元禄郷帳	天保郷帳	旧高旧領帳
		田畑石高総計	田方割合				
上赤塚村 下赤塚村 成増村	赤塚村	2034.518	62.7%	100	140	140	140
徳丸村 徳丸脇村 徳丸四葉村	徳丸村	1094.623	63.5%	100	149	150	150
金井窪村		120.000	52.6%	100	111	128	128
下板橋村		611.364	49.8%	100	163	182	182
上板橋村		886.868	43.8%	100	298	298	298
中丸村		58.363	56.0%	100	122	226	226
志村		142.533	77.6%	100	151	218	218
西台村		688.388	67.9%	100	158	158	158
中台村		203.680	68.1%	100	174	250	250
蓮沼村		602.688	71.1%	100	164	177	177
根ッ葉村		139.220	82.9%	100	160	163	162
前野村		244.158	50.1%	100	82	82	82
小豆沢村		105.852	37.7%	100	109	109	109
上新座村		500.800	62.2%	100	191	222	222
下新座村		396.969	64.4%	100	101	101	113
白子村 橋戸村		295.660	63.3%	100	115	216	217
土支田村		623.841	9.8%	100	214	214	214
上練馬村		1142.870	19.2%	100	232	232	232
下練馬村		1226.184	23.9%	100	216	218	216

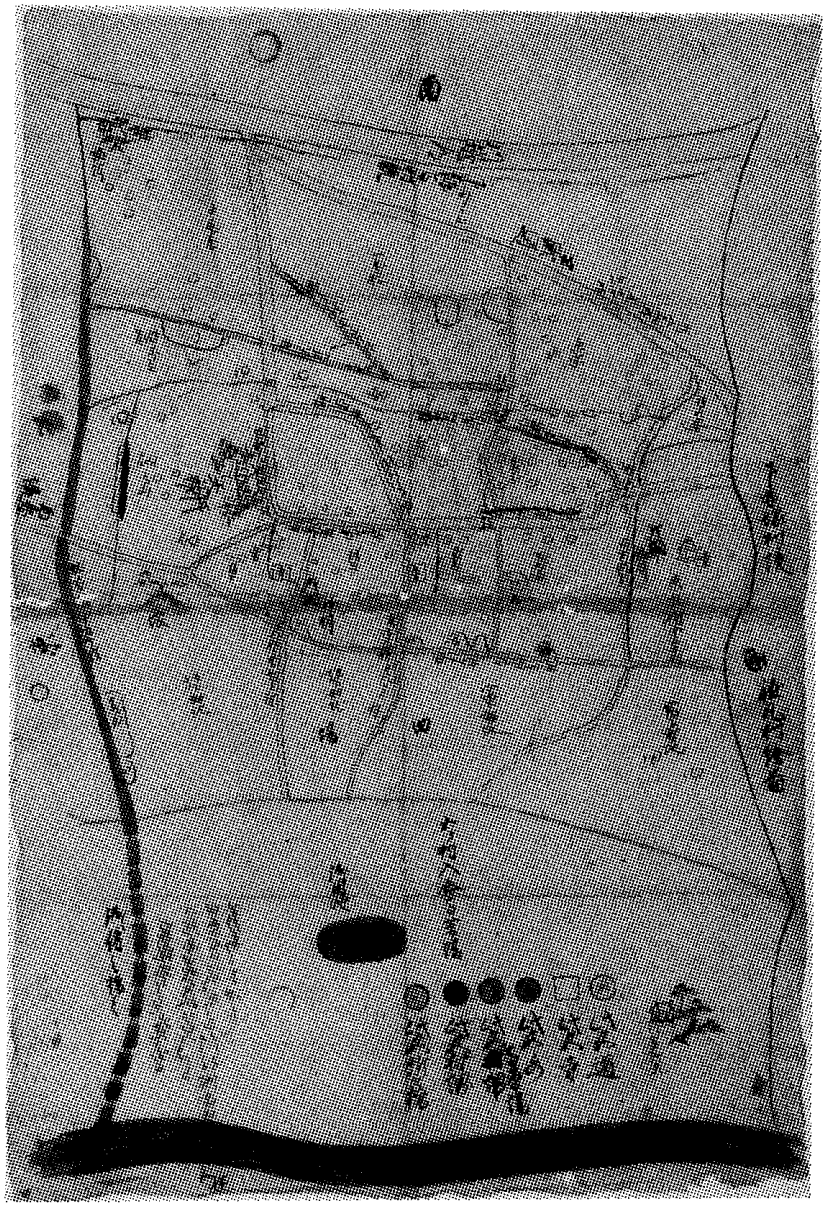


延宝５年徳丸村絵図（『板橋の絵図・絵地図』板橋区立郷土資料館、1994年より転載）

谷戸田がどこかは比定できないが、松月院の面した赤塚東谷、赤塚城周辺の支谷は谷奥と谷口との高低差が約二〇メートルあり、また、湧水が豊富であったので、谷戸田が成立する恰好の条件をもつところである。東別当田地・平沼作田とあるのは明らかに水田があったことを示しているが、それらの地の比定はできない。[48]

文安六年（一四四九）三月九日、庄加賀入道善寿が赤塚郷内の用水に独自の井料を課し、鹿王院の権益を侵すような事件も起こっているが、[49]古くは現在より赤塚側を流れていた白子川や先に述べた溜池は、入間川より高い所に位置することになる氾濫原の低地に対して水を供給することができたと考えられ、それも田畑の開発には影響を与えたであろう。これらの文書は一五世紀半ばまでのものであり、赤塚地区で水田耕作が行われていたことを示している。

徳丸地区の石高の変化のうち、「武蔵田園簿」では畑方が四〇〇石余とされるが、慶長三年（一五九八）の「徳丸村検地帳（畑方）」[50]によって畑方の石高を計算すれば、国高は四一五石余となる。この差は畑が多少なりとも田に転化されたことが想像されるが、両者の差はそれほど大きなものではない。とすると、



享保6年徳丸村絵図（『板橋の絵図・絵地図』より転載）

「武蔵田園簿」と「元禄郷帳」との間にある延宝五年（一六七七）の徳丸村絵図（安井新二郎家文書）は、開発の進行途中の土地利用の様子を示していると思われる。つまり、この絵図は中世の様子を多少なりと伝えるものと考えてよいだろう。

はけ（崖）を境に、川に向かって四〇〇間（一間は約一・八メートル）ほどの田地があり、そこから荒川まで六四〇間が芝草地であったことを教えてくれる。また台地上六四二間が畑地であることもわかる。

延宝五年の絵図と享保六年（一七一二）の徳丸村絵図を比較すると、両者の図面構成はほぼ同じである。川越道とほぼ平行に流れ、西台と徳丸を画する前谷津川と思われる水流の周辺に水田ができていること、田地のある低地より下の入会馬草場内に御用池は造られていることが違う。しかし、徳丸村の石高は「元禄郷帳」と「天保郷帳」[51]の間では変化は少なく大勢に影響するほどではなかったようである。とすれば、延宝五年くらいまでには、徳丸地区の水田・畑の開発はほぼ完了していたとみられる。いいかえるながら、徳丸村の開発は、延宝五年の段階ですでに限界に達していたように思えるから、中世期にも耕地の開発はかなり進んでいたと推定される。

以上のことは、赤塚郷の土地利用を考えたとき、赤塚城跡を取り巻く出口谷付近の谷には谷田が形成され、さらに赤塚から徳丸までの入間川に面した氾濫原では、白子川・前谷津川・溜池を用水源とした水田耕作が行われていたものと思われる。その田の形態は深田という地名がみられることから、おそらく摘田が形成されていたものとおもわれる。さらに台地上は、人々の生活の場であり、畑作を行う場であったと思われる。

むすびにかえて

赤塚郷がすでに明らかにされている歴史的変遷のなかで、どのような景観をもち、そのなかで人々がどのように生活してきたのかを、少しでも明らかにできればと思い、つらつらと述べてきた。

近世の土地台帳からのアプローチはすでに多くの人が取り組んできたが、中世の土地台帳のない赤塚郷では、同様の方法を用いるしかなかった。しかし地形・近世の絵図を比較検討することで多少は赤塚郷の景観を明らかにできたように思う。

ただ氾濫原に対する用水源を白子川・前谷津川・溜池ともつ赤塚郷は高い生産力をもった地域であることは黄梅院奉加銭替銭結解状で、鹿王院は赤塚から都合二六六貫文を奉加し、九八貫文を鹿苑院の代わりに支払っていることからみても明らかであると考える。

いいかえれば、鎌倉時代、没落した豊島宗家が再興なったとき、返付することなく得宗領となっていたのは赤塚郷がすでにある程度の生産能力がある地域、あるいは秘めた生産能力のある地域として認識されていたと考えてよいであろう。

最後に、本稿が『板橋区史』通史編上巻（一九九八年）において、筆者が執筆した部分に加筆、訂正したものであることをつけくわえておく。

註

(1) 『板橋区史』資料編2古代・中世　資料番号二四。板橋区　一九九四年。以下『板橋区史』資料編2古代・中世は『板』2－二四のように表す。

(2) 『とわずかたり』(岩波文庫)。

(3) 鈴木哲雄氏「古隅田川地域史における中世的地域構造」『千葉史学』四〇、一九八四年。原田信男氏「利根川中流域における荘園の村落景観」『中世東国史の研究』東京大学出版会　一九八七年他。

(4) 「武蔵豊島荘故地豊島区域の中世景観」『日本中世村落史の研究』校倉書房。一九八五年。

(5) 「岩淵宿の中世社会」『北区社会教育三四七・五三〇・五三二　北区教育委員会生涯教育課　一九九二年一〇月、一九九三年一・三月。

(6) 「中世岩淵の景観」『文化財紀要』第一一集　北区教育委員会　一九九八年。

(7) 台東区　一九九七年。

(8) 北区　一九九六年。

(9) 比志島文書　『板』2－二二四。

(10) 天文三年(一五三四)四月二二日付旦那願文　米良文書。『板』2－二五〇。

(11) 『板』2－五一八。

(12) 『板』2－四〇二。

(13) 『板橋区史』資料編3近世史料番号二八八。板橋区　一九九六年。以下『板』3－二八八のように表す。

(14) 中野達哉氏「近世初期武蔵における板倉勝重の検地と代官支配」『いたばし区史研究』第六号　板橋区史編さん調査会　一九九七年。

(15) 『板』3－四九七。

(16) 『新河岸三丁目　早瀬前遺跡』新河岸三丁目早瀬前遺跡調査会・板橋区教育委員会　一九八八年。

(17) 『板橋区史』資料編1考古　八四二頁　一九九五年。

(18) 『和光市史』通史編上巻　和光市　一九八七年。

(19) 『四葉地区遺跡』　四葉地区遺跡調査会　一九九二年。

(20) 『板橋区史』資料編1考古　八八九頁。『板橋区史』通史編上巻古代・中世編第五章第四節。板橋区一九九八年。以下『板』上巻五－四と表す。
(21) 町田文書　『板』2－一九一。
(22) 松月院文書　『板』2－四五七・四七〇。
(23) 『いたばしの地名』　板橋区教育委員会　一九九五年。
(24) 拙稿「豊島郡の郷村と都市」「付録・中世豊島郡板碑分布図」『豊島氏とその時代』　新人物往来社一九九八年。『板』上巻四－四・五－四。
(25) 「武蔵国豊島郡赤塚郷について」『地方史研究』第七巻三号。
(26) 『板』2－二二六。永徳三年（一三八三）二月二十九日付尼如春（渋川幸子）寄進状案　鹿王院文書。
(27) 「鎌倉大草紙」『蕨市史』資料編一史料番号三七七　蕨市。史料番号二四一解説によれば、渋川幸子の甥にあたる渋川義行が、蕨を取り立て居城とし、知行したされるのが渋川氏と蕨の関係を示す最初の人であるという。
(28) 『板』上巻三－二。
(29) 『板』2－二二七。尼如春（渋川幸子）寄進状案　鹿王院文書。
(30) 註26。
(31) 『板』2－二七七。
(32) 『板』2－二三五。
(33) 黒田基樹氏「戦国期の武蔵千葉氏－北条氏との関係を中心として－」『板橋区立郷土資料館紀要』第一〇号　一九九四。『板』上巻五－一。
(34) 『板』2－四四八～四五一。
(35) 『板』上巻五－一。
(36) 『東京都板橋区赤塚城跡遺跡』板橋区教育委員会　一九九二年。
(37) 『板』上巻五－四。
(38) 「新編武蔵風土記」巻一四。
(39) 『板』上巻四－五。
(40) 『寺誌』　松月院　一九九五年。

(41) 『いたばしの仏像』板橋区教育委員会　一九八九年。
(42) 『板』上巻四－四。
(43) 『いたばしの古道』板橋区教育委員会　一九八三年。
(44) 東京大学史料編纂所所蔵本。
(45) 小豆沢村は荒川に面しているが、蛇行する入間川の流路が崖線に最も接近しており、耕地の主体が台地上の畑地になるため、水田率が周辺より低いのであろう。
(46) 国立公文書館内閣文庫所蔵本。
(47) 註22。
(48) 「平沼」に関しては大正七年（一九一八）刊行の『北豊島郡誌』のなかで、現在の高島平七丁目の中の小字としてみることができる。これが中世までさかのぼることが出来るかは甚だ疑問であるが、早瀬前遺跡からもそう遠くない氾濫原の中にあることを考えると興味深いものがある。
(49) 『板』2－二三八。
(50) 『板』3－一六七。
(51) 国立公文書館内閣文庫所蔵本。

〔付記〕
ご退職される所理喜夫先生には、公私にわたりお世話になりました。厚く感謝申し上げます。今後は、お健やかにお過しなられ、時には我々を叱咤いただければ、幸いと存じます。